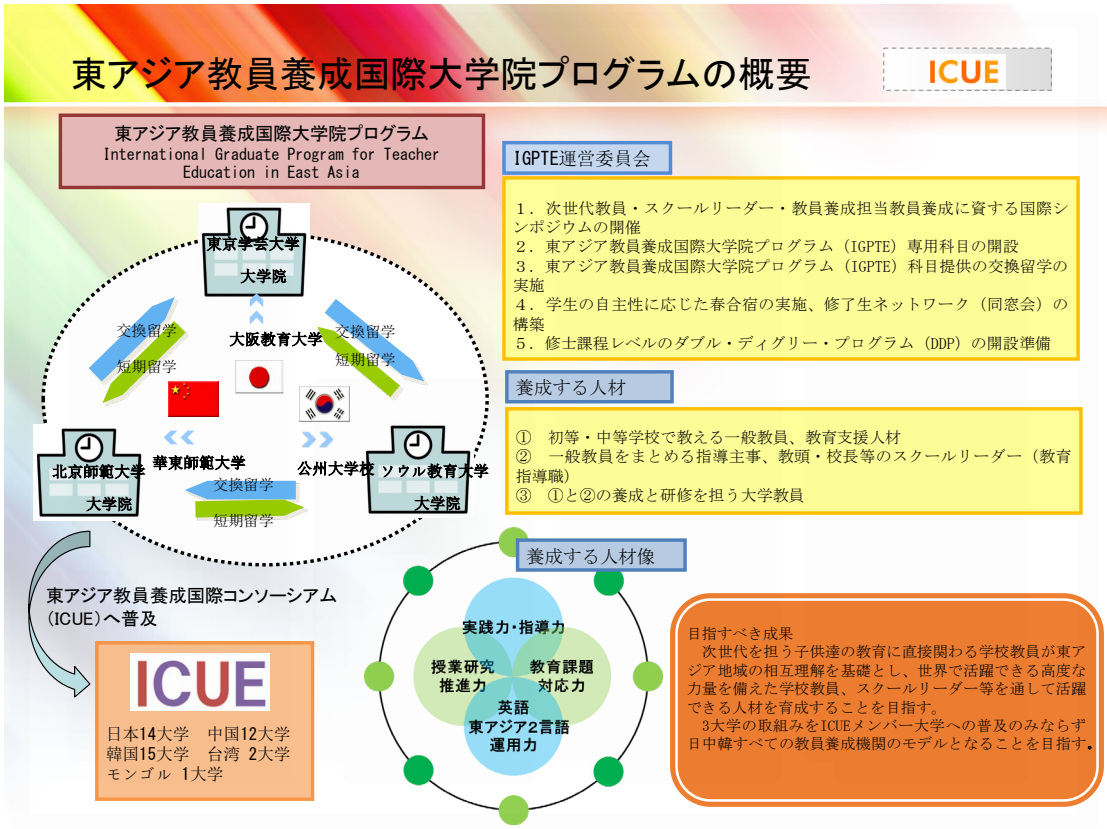
大学の世界展開力強化事業（平成28年度採択） 東京学芸大学　取組概要

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプA-②　CAMPUS Asia）

東アジア教員養成国際大学院プログラム

【事業の概要】

「東アジア教員養成国際大学院プログラム」（略称IGPTE）は、日中韓の教員養成大学の拠点である東京学芸大学・北京師範大学・ソウル教育大学校が共同して、教員養成大学ならではの各種プログラムを構築し、教員養成における「キャンパス・アジア」を目指すものである。今回3大学は東アジア教員養成国際コンソーシアム（略称ICUE、加盟校44校（2018年5月））の実績をふまえ、キャンパス・アジア事業を通じて、格段の国際化、交流の活性化を実現する。



【交流プログラムの概要】

下記4つの人材像の伸長を目的とする短期プログラムの実施、ICUEシンポジウム等学会における大学院生の研究発表、大学院生の専門性に応じた指導教員の選定、高度な研究指導の実施、半年・1年の長期留学、キャンパス・アジア・ネットワークと同窓会組織の構築、そして修士レベルのダブル・ディグリー等を通じて、世界で活躍できる高度な力量を備えた学校教員、スクールリーダー、教育研究者の養成に向けた質の高い教育を提供する。

【本事業で養成する人材像】

IGPTEの人材像は①高度な知識教養に裏打ちされた実践力指導力、②東アジアの学校教育において生起する複雑かつ多様な諸課題への対応力、③日中韓が世界に誇る授業研究力、④東アジアから世界で活躍できる人材に必須の英語力・東アジア2言語を身に付けることである。

【本事業の特徴】

教員養成分野で唯一採択された「国家プロジェクト」としての意識の高さは、3大学に共通するものである。各国の「お国柄」をふまえつつ、グローバル化対応に関する教員養成に固有の問題状況を整理し、本事業に取り組む。

【交流予定人数】　＜タイプA－②＞

	H28	H29	H30	H31	H32
日本(J)での受入	C3 K3	C8 K8	C9 K9	C9 K9	C9 K9
中国(C)での受入	J3 K0	J8 K0	J9 K6	J14 K6	J14 K6
韓国(K)での受入	J3 C0	J8 C0	J9 C6	J14 C6	J14 C6

1. 取組内容の進捗状況（平成28年度）

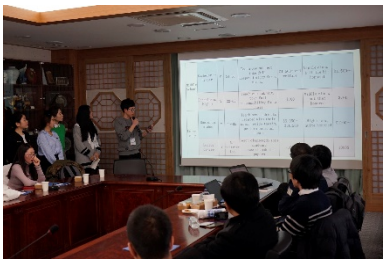
【東京学芸大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプA-② CAMPUS Asia））
東アジア教員養成国際大学院プログラム

■ 交流プログラムの実施状況

交流プログラムにおける学生のモビリティ

〈WPTCの場面、ソウル教育大学校〉



○ 日本人学生の派遣

韓国側において、CAMPUS Asia - Winter Program for Trilateral Cooperation 2017.2.5～2.18（WPTC）が企画され、東京学芸大学2名と北京師範大学15名の大学院生がソウル教育大学校を2週間訪問し、研修プログラムに参加した。北京師範大学において報告会も開催された。

学芸大から北京師範大学には1年間の予定で3名の学生を派遣した。

○ 外国人留学生の受入

東京学芸大学では、当初の年度計画を超える9名の中国側ICUE加盟校（うち北京師範大学3名）の学生、2名の韓国側ICUE加盟校等から学生を受け入れた。プログラム参加受入れ学生には、キャンパスアジアの人材像を育てる留学生科目を各学期1科目提供した。また春季に学生の自主性に基づく春合宿を開催した。

＜タイプA－②＞

	H28
日本(J)での受入	C9 K5
中国(C)での受入	J3 K0
韓国(K)での受入	J2 C15

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

北京師範大学、ソウル教育大学校と、教育組織、教育課程、単位算定、成績評価の方法及び学位授与方針等に関し協議を行うとともに、国内外の他大学の先行事例調査を行い、DDプログラム実施に向けた検討を行った。

本学における学習成果に対する単位付与については、派遣学生・受入学生に対するもの、短期・長期のものなど、複数の層に分けて考えていく。

このうち、長期受入れ学生については、留学生センター提供の留学生科目だけでなく、学部・大学院の正規科目も学生の日本語能力に応じ受講を認めている。こうした正規科目の質は教員養成カリキュラム改革推進本部と教務委員会が認める科目ということで保証されている。

単位を付与しない短期プログラム等は、プロセス評価、形成的評価、パフォーマンスに基づく評価（ルーブリック・ポートフォリオを含む）、アウトカム評価等を組み合わせ、プログラムの質保証と質向上に向けた取組に活かす。

〈受入れ学生の春合宿　日光にて〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のために、キャンパス・アジア事業に専従する専任教員（コーディネーター）1名と常勤職員1名を平成29年度から配置するための準備を進めた。また大学院・学部の教育課程と国際関連活動の双方をつなぐ戦略的な取り組みとして、全学組織としてキャンパス・アジア推進室を位置づけ学生支援を行い、ダブルディグリー等大学院の国際共同教育に対応するキャンパス・アジア事業推進委員会を立ち上げる準備を行ったところである。

〈受入れ学生の授業場面
小石川植物園にて〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

東京学芸大学はキャンパスアジアを通じて、国際化を大きく前進させる計画である。長年の懸案であった受入れ学生の対応を充実させるべく、コーディネーターを配置し、きめ細やかな学生指導を実現することとした。また人材像に掲げる高い語学運用力を可能とする、留学準備をかねた言語ラボもまもなく開設する予定である。

SNSを活用した学生ネットワークの構築等も進めるとともに、専用ウェブサイトを早期に立ち上げ、情報公開と成果の普及に役立てる。

■ グッドプラクティス等

東京学芸大学ではキャンパスアジアの受入れ学生に対し、留学生科目「日本の教育と文化」や「東アジア教師論演習」といった科目を通じて、人材像育成と学生間の交流に貢献している。また派遣学生の開拓のために、平成29年度から学部正規科目に「学芸フロンティアB」（留学のすすめ）を開設し、留学の意義や計画の立て方等を学ぶ機会を提供する。

2. 取組内容の進捗状況（平成29年度）

【東京学芸大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプA-②　CAMPUS Asia ））
東アジア教員養成国際大学院プログラム

■　交流プログラムの実施状況

北京師範大学、ソウル教育大学校との間で、教育大学の特色を活かした短期語学・文化研修プログラムや交換留学プログラムなど、多彩な相互交流プログラムを実施し、当初計画数を上回る交流を実現した。

〈北京師範大学への交換留学〉

〈ソウル教育大学への夏季短期留学〉

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○　日本人学生の派遣

東京学芸大学から北京師範大学に3名（2017年9月から2名、2018年2月から1名）、ソウル教育大学に3名（2017年9月から1名、2018年3月から2名）を、それぞれ交換留学生として派遣した。

また、夏季・春季にそれぞれ北京・ソウルへの短期語学・文化研修プログラムが企画され、北京には夏季4名、春季6名、ソウルには夏季6名、春季5名の日本人学生が、それぞれ参加した。

2017年6月にはソウル教育大学主催の東アジア教員養成国際シンポジウムにおいて修士課程学生がポスター発表を行った。

○　外国人留学生の受入

交換留学生として、春学期・秋学期合わせて、中国側ICUE加盟校から15名（うち北京師範大学5名）、韓国側ICUE加盟校から10名（うちソウル教育大学から5名）を受け入れた。プログラム参加受入れ学生には、昨年に引き続き、キャンパスアジアの人材像を育てる留学生科目を各学期1科目提供し、1年間のプログラムの締めくくりとして最終発表会も実施した。また夏季・春季にそれぞれ学生の自主性に基づく合宿を開催した。

2017年7月には東京学芸大学がSummer Program for Trilateral Cooperation (SPTC)を主催し、中韓の大学院生計10名が、日本の教育について共修し、学校における交流活動や日本文化体験を行う機会を提供した。

＜タイプA－②＞

	H29
日本(J)での受入	C24 K18
中国(C)での受入	J13 K1
韓国(K)での受入	J15 C24

■　質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

本事業のキャンパス・アジアプログラムは短期研修・交換留学・DDプログラムの3種から構成される。 東京学芸大学、北京師範大学及びソウル教育大学校の3大学は、教育組織、教育課程、単位認定・互換、学位授与方針等に関し繰り返し協議を行うとともに、国内外の先行事例をも参照の上、DDプログラム実施に向けた検討を進めた。キャンパス・アジアプログラムの概要や学生の声はホームページやリーフレット等の媒体を通じて公表しており、 内部質保証が適切に行われていることを外部に示している。

〈受入交換留学生最終発表会〉

■　外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のために、2017年度、キャンパス・アジア事業に専従する専任教員（コーディネーター）1名と常勤職員1名、非常勤職員1名を配置した。また大学院・学部の教育課程と国際関連活動をつなぐ全学組織としてキャンパス・アジア推進室と事業委員会を立ち上げ、プログラムの開発・運営を行うとともに、受入れ・派遣学生の交流・学習スペースとしてキャンパス・アジアラウンジを新設した。

〈受入交換留学生夏合宿 山梨〉

■　事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

東京学芸大学はキャンパスアジアを通じて、国際化を確実に前進させている。中韓への長期・短期派遣学生数は増加傾向にあり、受入れ学生の満足度も向上している。2016年度の交換留学受入れ・派遣学生の研修成果は『研修レポート集』として発行され、事業の情報を公開・普及している。ホームページでは、交換留学で中韓に派遣中の学生が留学通信を定期的に発信し、受入れ学生の合宿レポート等も公開されている。

〈SPTC　日本文化体験〉

■　グッドプラクティス等

東京学芸大学ではキャンパスアジアの受入れ学生に対し、留学生科目「日本の教育と文化」や「東アジア教師論演習」「アジアの教育演習」といった科目を通じて、人材像育成と学生間の交流に努めている。また派遣学生のために、2017年度から学部正規科目に「学芸フロンティアB」（留学のすすめ）を開設し、留学の意義や計画の立て方等を学ぶ機会を提供している。大学院生には3大学でCA指定科目の受講を求めている。

3. 取組内容の進捗状況（平成30年度）

【東京学芸大学】

【東アジア教員養成国際大学院プログラム】（選定年度28年度・（タイプA-② CAMPUS Asia））

■ 交流プログラムの実施状況

〈北京師範大学への短期留学プログラム〉

〈ソウル教育大学校への短期留学プログラム〉

北京師範大学、ソウル教育大学校との間で、教育大学の特色を活かした短期語学・文化研修プログラムや交換留学プログラムなど、多彩な相互交流プログラムを実施し、当初計画数を大幅に上回る交流を実現した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

東京学芸大学から北京師範大学に5名（2018年9月から4名、2019年2月から1名）、ソウル教育大学校に2名（2019年3月から）を、それぞれ交換留学生として派遣した。その他、中韓共に各1名を東アジア教員養成国際コンソーシアム（以下ICUE）加盟校に派遣した。また、夏季・春季等にそれぞれ北京・ソウルへの短期語学・文化研修プログラムが企画され、北京には夏季15名、春季11名、ソウルには夏季45名、冬季のWinter Program for Trilateral Cooperation（WPTC）に7名の日本人学生が、それぞれ参加した。2018年11月には、東京学芸大学主催の第13回ICUEシンポジウムにおいて、大学院学生2名（博士課程1名、修士課程1名）と修士研究生1名がポスター発表を行った。

○ 外国人留学生の受入

交換留学生として、春学期・秋学期合わせて、中国側ICUE加盟校から22名（うち北京師範大学7名）、韓国側ICUE加盟校から15名（うちソウル教育大学校から7名）を受け入れた。プログラム参加受入学生には、昨年に引き続き、キャンパス・アジアの人材像を育てる留学生科目を各学期1科目提供し、1年間のプログラムの締めくくりには最終発表会も実施した。また夏季・春季にそれぞれ受入学生の自主性に基づく合宿を開催した（夏季は伊東、春季は河口湖周辺を訪問）。

2018年7月には東京学芸大学がSummer Program for Trilateral Cooperation (SPTC)を主催し、中韓の大学院生計10名が、日本の教育について共修し、小・中・高等学校における児童・生徒や教員との交流活動や、日本文化体験を行った。

＜タイプA－②＞

	H30
日本(J)での受入	C29 K21
中国(C)での受入	J32 K 2
韓国(K)での受入	J55 C24

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

本事業では、質保証委員会のような形はとってはいないものの『質保証を伴った共同教育プログラム実施のための手引書』等を参考に、ほぼ毎週開催している定例の打ち合わせやキャンパス・アジア関連の会議において、学位プログラム・修了証プログラム・それ以外のプログラムについて、質保証・質向上に向けた取組を進めている。

〈受け入れ交換留学生の最終発表会〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のために、2018年10月よりキャンパス・アジア事業に専従するコーディネーター1名と交換教員1名（北京師範大学所属）を東京学芸大学に配置した。またキャンパス・アジア推進室と事業推進委員会が中心となって、学生の受入・派遣に関わる環境整備やダブルディグリー・プログラム開始に向けたさまざまな準備を進めてきた。さらに日本人学生の語学力向上をはかるため、言語ラボを継続した。

〈受け入れ交換留学生の春合宿〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

東京学芸大学の国際化は数字にも現れているが、近年格段に進展しているという認識が学内に広がりつつある。平成30年度、国際交流に関わる本学ウェブサイトが更新され、キャンパス・アジアにとどまらず、本学の欧米・東南アジアを含む短期プログラムの多様な情報が発信されている。キャンパス・アジアは、本学の国際交流を活性化させ、学生の視野の拡大に確実につながっている。

■ グッドプラクティス等

前年度記載の受入交換留学生と派遣前日本人学生に提供しているキャンパス・アジア必修科目以外にも、2つのグッドプラクティスをあげたい。一つは、キャンパス・アジアのホームページである。現在日本語ページのみではあるが、毎週北京とソウルに滞在中の学生による留学便りを掲載している。その他、本事業の豊富な活動が定期的にウェブ上で発信されている。二つ目はダブルディグリー・プログラムのスタートである。慎重に設計してきたもので、他の教育系大学・学部にも参考になるものと期待している。

〈受入交換留学生のクリスマス交流会〉

4. 取組内容の進捗状況（令和元年度）

【東京学芸大学】

【東アジア教員養成国際大学院プログラム】（選定年度28年度・（タイプA－② CAMPUS Asia））

■ 交流プログラムの実施状況

〈北京師範大学への短期留学プログラム〉

〈ソウル教育大学校への短期留学プログラム〉

北京師範大学、ソウル教育大学校との間で、教育大学の特色を活かした短期語学・文化研修プログラムや交換留学プログラムなど、多彩な相互交流プログラムを実施し、新型コロナウィルス感染拡大の影響を受けつつも、当初計画数を上回る交流を実現した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

東京学芸大学から北京師範大学に2名、ソウル教育大学校に1名を、それぞれ2019年9月から交換留学生として派遣した。その他、中韓共に各1名を東アジア教員養成国際コンソーシアム（以下ICUE）加盟校に派遣した。また、夏季・冬季にそれぞれ北京・ソウルでの短期語学・文化研修プログラムが企画され、北京には夏季21名、ソウルには夏季15名、冬季のWinter Program for Trilateral Cooperation（WPTC）に13名（うち、1名は財政支援対象外）の日本人学生が、それぞれ参加した。2019年10月には、中国・陝西師範大学で開催された第14回ICUEシンポジウムにおいて、修士課程の日本人大学院生1名（他、中国人大学院生3名）が分科会において研究発表を行った。

○ 外国人留学生の受入

交換留学生として、春学期・秋学期合わせて、中国側ICUE加盟校から22名（うち、北京師範大学8名）、韓国側ICUE加盟校から12名（うち、ソウル教育大学校から4名）を受け入れた。プログラム参加受入学生に提供するキャンパス・アジアの人材像を育む留学生科目は、昨年度から1科目増やして各学期2科目とし、1年間のプログラムの締めくくりとして最終発表会も実施した。

2019年7月末から8月初旬にかけて、東京学芸大学がSummer Program for Trilateral Cooperation (SPTC)を主催し、中韓の大学院生計10名が、日本の教育について共修し、小・中・高等学校における児童・生徒や教員との交流活動や、日本文化体験を行った。

＜タイプA－②＞

	R1
日本(J)での受入	C 27 K 17
中国(C)での受入	J 29 K 5
韓国(K)での受入	J 30 C 25

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

本事業では、質保証委員会のような形はとってはいないものの『質保証を伴った共同教育プログラム実施のための手引書』等を参考に、ほぼ毎週開催している定例の打ち合わせやキャンパス・アジア関連の会議において、学位プログラム・修了証プログラム・それ以外のプログラムについて、質保証・質向上に向けた取組を進めている。

〈受入交換留学生の最終発表会〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のために、昨年度に引き続き、キャンパス・アジア事業に専従するコーディネーター1名と交換教員1名（北京師範大学所属）を東京学芸大学に配置した。またキャンパス・アジア推進室と事業推進委員会が中心となって、学生の受入・派遣及びダブルディグリー・プログラム（DDP）運用に関わるさまざまな環境整備等を進めてきた。さらに日本人学生の語学力向上をはかるため、言語ラボを継続した。

〈派遣留学生の最終発表会〉

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

東京学芸大学の国際化は数字にも現れているが、近年格段に進展しているという認識が学内に広がりつつある。本学独自の学芸フロンティア科目に、キャンパス・アジア事業の一環としてスタートした「留学のすすめ」に継いで、国際交流に関係する科目が増設されてきている。本学の国際交流を活性化させ、今後のカリキュラム改革の1つの柱ともなり得るもので、学生にとっても更なる視野の拡大につながっている。また、DDPの開始により、キャンパス・アジア事業に直接関わらない教員にも、国際交流に対する関心が高まってきていることも、成果の1つと言える。

〈日中韓三大学間協力によるSPTCプログラム〉

■ グッドプラクティス等

過年度記載済みの受入交換留学生と派遣前日本人学生に提供しているキャンパス・アジア必修科目、また、キャンパス・アジアのホームページの充実、DDPの開始については、現在も継続し進めていることである。昨年度のグッドプラクティスとしては、以下の2点を挙げておきたい。1つは、DDPに基づき、実際に北京師範大学から2名の修士課程の大学院生を受け入れたということ。もう1つは、北京師範大学からの交換教員による研究発表会の実施により、多くの日本人学生が日本にいながらにして海外の研究実践に触れる機会を得ることができたということである。こうした取り組みも、他の教育系大学・学部にも参考になるものと期待している。

〈受入交換留学生のクリスマス交流会〉

5. 取組内容の進捗状況（令和2年度）

【東京学芸大学】

【東アジア教員養成国際大学院プログラム】（選定年度28年度・（タイプA－② CAMPUS Asia））

■ 交流プログラムの実施状況

新型コロナウィルス感染症の影響を受け、交流プログラムを当初計画のとおりには実施することができなかった。一方で、遠隔からの特別講義や、予定していなかった語学交流プログラムなど、オンラインを活用した新しい事業を実施することができた。

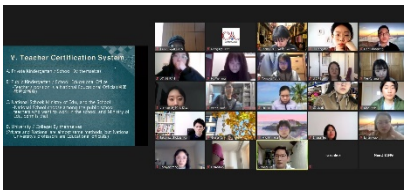
＜タイプA－②＞

	R2
日本(J)での受入	C 6 K 0
中国(C)での受入	J 2 K 1
韓国(K)での受入	J 10 C 15

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

新型コロナウィルス感染症の影響を受け、物理的な移動を伴う学生の派遣は殆ど行えなかった。交換留学では、当初の予定では2020年度春学期も派遣留学を継続している予定だった学生が1名を除き2019年度末までに派遣留学を終了し、新たに派遣する予定であった学生も出発することができなかった。2021年2月より、1名の学部学生が北京師範大学のオンライン授業を履修している。ダブルディグリー・プログラム（以下DDP）では、2020年9月に、1名の学生が北京師範大学に、2名の学生がソウル教育大学校に入学した。北京師範大学への入学生は、2020年9月より、オンラインによる授業履修、研究指導を開始している。ソウル教育大学校への入学生のうち1名は、2021年3月に渡航、留学を開始した。また、短期プログラムでは、ソウル教育大学校主催の冬季プログラム、Winter Program for Trilateral Cooperation（WPTC）がオンラインにより開催され、9名の学生が参加した。その他、2020年10月から12月にかけて、ソウル教育大学校と本学の学生をマッチングし、タンデムによるオンライン語学交流を実施し、11名の学生が参加した。



〈2021 Winter Program for Trilateral Cooperation〉

○ 外国人留学生の受入

新型コロナウィルス感染症の影響を受け、物理的な移動を伴う学生の受入は行えなかった。交換留学では、春学期は新規受入を中止したため、2019年度秋学期受入の留学生だけで、プログラムをオンラインにより継続した。秋学期はオンラインに限って受入を行ったが、キャンパス・アジアの人材像を育む留学生科目を1科目開設し、中国側ICUE加盟校からの留学生6名（うち、北京師範大学2名）が履修した。なお、北京師範大学の2名は2021年度春学期も引き続き在籍し、1年間のプログラムの締めくくりとしての最終発表会に向けて励んでいる。DDPでは、北京師範大学より2020年10月入学予定の学生が1名いたが、新型コロナウィルス感染症の影響が続き先が見通せないことから、入学直前に辞退することとなった。

〈2019年度CAMPUS Asia
受入留学生オンライン最終発表会〉

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

本事業では、質保証委員会のような形はとってはいないものの『質保証を伴った共同教育プログラム実施のための手引書』等を参考に、ほぼ毎週開催している定例の打ち合わせやキャンパス・アジア関連の会議において、学位プログラム・修了証プログラム・その他のプログラムについて、質保証・質向上に向けた取組を進めている。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のために、昨年度に引き続き、キャンパス・アジア事業に専従するコーディネーター1名を配置した。新型コロナウィルス感染症の影響を受け、実際の渡航は実現できていないが、キャンパス・アジア推進室と事業推進委員会が中心となって、学生の受入・派遣及びDDP運用に関わるさまざまな環境整備等は計画通り進めてきた。日本人学生の語学力向上をはかるための言語ラボも継続した。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

東京学芸大学の国際化は数字にも現れているが、近年格段に進展しているという認識が学内に広がりつつある。本学独自の学芸フロンティア科目に、キャンパス・アジア事業の一環としてスタートした「留学のすすめ」に継いで、国際交流に関係する科目が増設されてきている。本学の国際交流をますます活性化させ、現在のカリキュラム改革の1つの柱となっている。また、DDPの開始により、学生の間にもプログラムが広く認知されてきていることも、成果の1つと言える。

■ グッドプラクティス等

令和2年度のグッドプラクティスとしては、以下の3点を挙げておきたい。1つは、北京師範大学へ1名、ソウル教育大学校へ2名の修士課程の大学院生が、 DDPに基づきそれぞれ入学を許可され、派遣することになったこと（ただし、新型コロナウィルス感染症の影響で、北京師範大学の1名、ソウル教育大学校の1名は渡航準備中である）。もう1つは、オンラインによるキャンパス・アジア科目を開設することができ、北京師範大学他の留学生が参加し、実施できたこと。さらに、オンラインによる特別授業及びシンポジウムを開催し、多くの日本人学生が日本にいながらにして海外の研究実践に触れる機会を得ることができたことである。こうした取り組みも、今後の教育系大学・学部の教育活動の参考になるものと期待している。